

戦傷病者史料館

しょうけい館 通信

しょうけい館
移転しました



しょうけい館

戦傷病者史料館

Historical Materials Hall for the Wounded and Sick Retired Soldiers, etc.

館名について

「しょうけい館」は、戦傷病者とそのご家族等が戦中・戦後に体験したさまざまな苦闘についての
証言・歴史資料・書籍・写真などを収集・保存・展示し、後世に伝えるための施設を
開設する目的の施設です。

館名は、「せけ館」・「けい館」という意味の「せけ」です。手帳からたまたま多くの入りに関して
もらえよう「しょうけい」という平仮名表記にしました。なお、館の役割を示すものとして
「戦傷病者史料館」という名称を付け加えています。

Historical Materials Hall for the Wounded and Sick Retired Soldiers, etc.

TOPICS

P1 春の企画展「義手と仕事～戦争で手を失った戦傷病者～」開催

P4 新施設紹介コーナー

P5 学芸員コラム「パラリンピックの歴史と戦傷病者」

Vol. 001

February 2024

TOPICS 1 企画展 紹介

令和5年度 春の企画展

義手と仕事 ～戦争で手を失った戦傷病者～

春の企画展では義手を使用していた戦傷病者の労苦を、仕事面に焦点をあてて紹介しています。

戦争での負傷が原因でやむなく手や腕の切断をし、義手をつけて生活を送ることになった戦傷病者は、どのように義手を自分の手としていたのでしょうか。

当たり前のように動かすことのできた手が、戦争に

よって失われしまい、その喪失感と向き合いながら、義手を自分の手として使い慣れるまでには、血のにじむような努力が必要でした。

今回は、義手をつけて日常生活の動作に慣れ、義手で仕事をするまでの道のりと、戦傷病者それぞれの仕事、場面場面での気持ちなどを証言や手記を通して見つめます。



義手を装着しての農作業の様子

会期 令和6年3月5日(火)より
令和6年6月2日(日)まで
時間 10:00～17:30(入館は17:00まで)
会場 しょうけい館 2階企画展示室
協力 川村義肢株式会社

しょうけい館通信の発行にあたって

これまでしょうけい館では、広報誌を戦傷病者とそのご家族の方々へ向けた「友の会通信」として発行していました。館の移転にあたり、今後はより広くしょうけい館のことを知っていただくため、誌名を「しょうけい館通信」へと改め、広く配布をすることにいたしました。今後ともしょうけい館をよろしくお願いいたします。

特別企画展 会期終了

武良茂(水木しげる)の人生

移転後の企画展示として、特別企画展「武良茂(水木しげる)の人生」を開催しました。

漫画家である水木しげる氏の入営から受傷までの体験、復員後に漫画家となり戦争体験を描くまでを、作品や資料を通して紹介しました。旧施設でも水木しげる氏の展示をおこなっていましたが、移転を機に展示作品を入れ替えて紹介しました。

また、水木氏本人と奥さんの登場する証言映像を同時上映しました。



展示の様子

テーマ別展示

箱根療養所

3階常設展示室の一角では、テーマ別展示「箱根療養所」を開催しています。

脊髄損傷の戦傷者を専門に収容した箱根療養所のあゆみなどを、廃兵院、傷兵院時代から紹介しています。展示資料は療養所での暮らしに関するものや、1964年の東京パラリンピックに出場した際のメダル、記念トロフィーなどです。

また、箱根療養所の変遷をまとめた映像も同時上映しています。

このテーマ別展示は、寄贈資料をテーマを設けて紹介し、定期的に展示替えをおこなって多くの資料を見ていただけるように設けた新しいコーナーです。

今後は「作品に込めた労苦」や「義肢」などを紹介する予定です。

会期 令和5年10月25日(水)より令和6年3月31日(日)まで



傷兵院(昭和11年頃)



竹細工を編む入所者

TOPICS 2 常設展 紹介

新施設の紹介

2023年10月25日、しょうけい館は新しい施設に移転開館しました。移転に伴い新しくなった展示をご紹介します。施設の詳細は、ホームページまたはパンフレットをご覧ください。

NEW

イントロダクション映像

展示室の入口ゲートを入ると、展示を見るための導入映像が始まります(約2分)。戦争は決して過去のことではなく、今私たちの近くで起きてても不思議ではないことを感じてもらい、戦傷病者の体験を自分ごととしてとらえられるよう工夫しました。

UPDATE

コーナー紹介画像「ある兵士の手記」

常設展示室の各コーナーに関する当時の社会背景を踏まえながら、「ある兵士」の体験についてアニメーションを用いて紹介しています。旧施設では文字で表示していましたが、画像を通してみることで、各コーナーがテーマとしている事柄が理解しやすくなるよう工夫しました。



イントロダクション映像



コーナー紹介画像



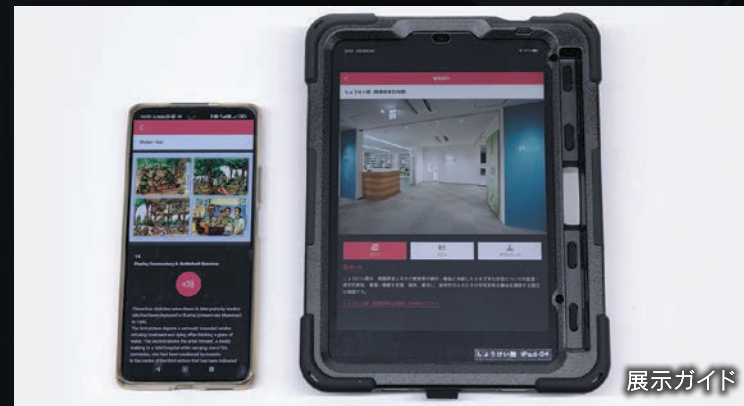
触れて知る展示



野戦病院ジオラマ



タッチパネル



展示ガイド

UPDATE

野戦病院ジオラマ

自然の洞窟を利用して作られた、南方の野戦病院の様子を再現したジオラマです。人形は、元の施設から移設しましたが移転にあたって、解説ナレーションを更新するとともに、解説と連動する照明装置を導入しました。ジオラマの臨場感はそのままだに、より分かりやすい解説を目指しました。

NEW

タッチパネル

各コーナーのさらに詳しい解説や、関連資料の画像をタッチパネルのディスプレイで紹介しています。また、戦傷病にまつわるテーマやキーワードの解説を読むこともできます。

NEW

触れて知る展示

実際に戦傷病者が使用していた義肢をもとに作られた、義手と義足に触れることができるコーナーを新しく設けました。義手は作業用のモデルで、触って構造を調べたり、手を入れることができます。義足は左足を太腿で切断した戦傷病者のモデルで、重さは3kgにもなり、持ち上げることができます。

常設展示を見た後に、義肢に触れることで戦争で手足を失うことはどのようなことなのかを考えるきっかけにしてほしいと思います。

NEW

展示ガイド

ミュージアム展示ガイド「ポケット学芸員」を新たに導入しました。「ポケット学芸員」は、お手持ちのスマートフォンやタブレットで、解説文を読んだり、解説音声を聞いたりできるアプリです。無料でダウンロードできます。展示見学の際にぜひご利用ください。

TOPICS 3 レポート

合同巡回展 会期終了

戦傷病者の労苦を伝える宮城展

しょうけい館では年に一度、全国の会場で展覧会を開催しています。令和5年度は、宮城県の“せんだいメディアテーク”にて、昭和館・しょうけい館・平和祈念展示資料館と合同巡回展を開催しました(令和5年12月9日(土)～19日(火))。

本展では移転開館したしょうけい館の常設展示室の展示内容をコンパクトにまとめ、戦争で怪我や病気になった戦傷病者の体験を資料と映像などで紹介しま

した。また、戦傷病者を支えた人々と、重度の障がいを負って車いす生活となった戦傷病者の専門施設である箱根療養所に焦点を当てたコーナーを設けて、関連する資料を展示し、証言などの映像も上映しました。

令和6年度は大分県にて、昭和館、平和祈念展示資料館と合同巡回展を開催する予定です。多くの方々にご来場いただけるよう、広報などの準備を進めています。



会場の様子



箱根式車いす

来館者の感想

戦地での治療の様子、帰国後の結婚の話し、1964年東京パラリンピックに戦争でけがをした選手も出場していたことなど、知らなかったことが多く知れた。



40代男性

これまで戦傷病者が過ごした戦後の生活について知る機会がなかったので、今回学ぶことができて良かったです。



40代女性

戦傷病者のみではなく、それを支える妻などに焦点を当てられていて、通常と違う目線で考えることができたから。



20代女性

TOPICS 4 コラム

パラリンピックの歴史と戦傷病者

今年は4年に一度のパラリンピックがフランスのパリで開催されます。障がい者スポーツ大会として、アスリートたちが集うパラリンピックですが、実は戦争で負傷した車いす患者のリハビリテーションとしておこなっていたスポーツ大会が由来となっています。

パラリンピックの歴史

画像1は1964年東京パラリンピックの銀メダル(水泳)です。メダルには「STOKE MANDEVILLE INTERNATIONAL GAMES(ストークマンデビル国際ナショナルゲームズ)」と刻まれています。ストーク・マンデビルとはロンドン郊外にある病院の名前です。この病院には、戦争で脊髄を損傷した兵士の治療を専門とするセンターが、第2次世界大戦中より設置されていました。そこでは、センター長のルードビヒ・グットマン氏が先進的なリハビリテーションとして、スポーツを取り入れた治療をおこなっていました。1948(昭和23)年には、入院患者によるスポーツ競技大会が開催され、それが国際ストーク・

マンデビル競技大会(現在の世界車いす・切断者競技大会)へと発展していきます。ローマオリンピック開催の1960(昭和35)年には、オリンピック発祥の地ローマで大会が開催されたため、後に第1回パラリンピックに位置づけられることになりました。そして、1964年には第13回国際ストーク・マンデビル競技大会が東京パラリンピックとして開催され、日本からは国立箱根療養所で療養していた戦傷病者が参加しました。



画像1 1964年東京パラリンピック銀メダル(水泳)

1964年東京パラリンピックに出場した戦傷病者

画像2は1964年の東京パラリンピックに出場した青野繁夫氏です。青野氏は、水泳(50m背泳ぎ)とフェンシング(団体)で銀メダルを獲得した戦傷病者の選手です。東京パラリンピックには、車いすを使用する選手が22ヶ国から約400名出場しました。そのうち、日本人選手は53名でした。青野氏がパラリンピックに出場した時は40歳を過ぎており、それまでに直面した苦労は想像に難くありません。そんな青野氏は、大会後に芽生えた思いについて「今までの単調で平凡な闘病生活から一変し、自分の可能性を試すという希望を持つことができただけでなく、今後自らをより一層強く待して将来に期待し、人間として与えられた使命を果たす如く、鋭意努力したい」と記しています。

脊髄損傷者のリハビリテーションとして始まったスポーツは、残された体の機能を生かすだけでなく、心の活力にもなっていました。



画像2 青野繁夫氏(撮影1964年)

2024年 イベントスケジュール

3/5 火 ▶ 6/2 日

春の企画展「義手と仕事～戦争で手を失った戦傷病者～」

4/2 火 ▶ 6/30 日

テーマ別展示「義肢」

4/14 日

語り部定期講話会

5/12 日

語り部定期講話会

6/4 火 ▶ 9/1 日

夏の企画展「戦傷病者の労苦を伝える」(仮)

7/2 火 ▶ 9/29 日

テーマ別展示「作品に込めた労苦(仮)」

戦傷病者・ご家族へのお知らせ

資料寄贈のお願い

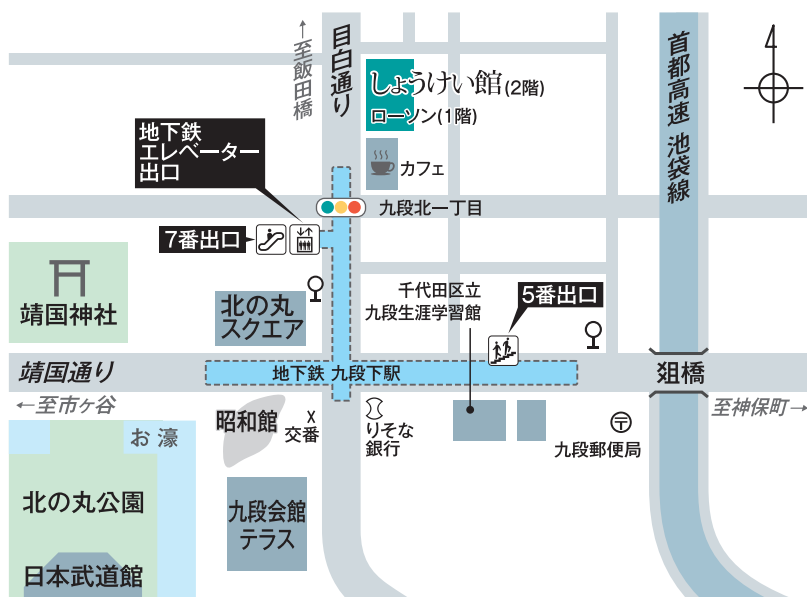
戦傷病者の皆様に関する資料(写真、回想記、軍装品、摘出弾、義肢、受傷や恩給に関する文書等)、奥様やご家族に関する資料(日記、写真等)、傷痍軍人会、妻の会に関する資料(会旗、名簿等)をお持ちの方からのご連絡を待ちしております。

資料は館で大切に保管し、継承事業に活用させていただきます。

証言映像収録のお願い

証言映像は、戦傷病者とそのご家族の戦中・戦後の労苦を伝えるための貴重な資料として活用されます。引き続き当館では、証言映像の収録を進めて参りますので、年齢、地域にかかわらず、戦傷病者とそのご家族で撮影にご協力頂ける方は、ぜひ当館までお知らせ下さい。

ご来館のみなさまへ



地下鉄を利用の場合

- 東京メトロ
九段下駅(東西線・半蔵門線)
7番出口より徒歩3分、5番出口より徒歩5分
- 都営地下鉄
九段下駅(新宿線)
7番出口より徒歩3分、5番出口より徒歩5分

バスを利用の場合

- 都営バス
九段下(飯64系統)より徒歩4分
- 千代田コミュニティバス
千代田保健所(九段下駅)より徒歩5分

※駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。

当館は、戦傷病者とそのご家族が戦中・戦後に体験したさまざまな労苦についての証言・歴史的資料・書籍・情報を収集、保存、展示し、次世代の人々にその労苦を知る機会を提供する国立の施設として、平成18年に開館し、令和5年に移転しました。



www.shokeikan.go.jp

東京都千代田区九段北1-11-5 グリーンオーク九段2階

Tel: 03 (3234) 7821 Fax: 03 (3234) 7826

開館時間: 10:00 ~ 17:30 (入館は17:00まで)

休館日: 毎週月曜日(祝日または振替休日の場合はその翌日)

